

# ほぼ月刊 桑名歴史こぼなし

Vol.6 2019年8月1日発行

編集・発行：©社会福祉法人 桑名市社会福祉協議会 文化スポーツ振興課 TEL0594-22-8311

## <長島町が生んだ銀メダリスト森昌彦>

長島町福吉の国道23号線沿いに昭和39(1964)年5月創業の老舗寿司店**まつや寿司**があります。昭和40(1965)年8月25日、ここに桑名出身者で唯一のメダリスト**森昌彦**(1965～、以下敬称略)が誕生しました。小さい頃は、近所の友人たちとドッジボールや缶蹴り、昆虫採集をして活発に遊ぶ「ガキ大将」だったといえます。野球好きだった父**康彦**(1941～2013)の影響で**中日ドラゴンズ**のファンとなり、弟**孝司**(1968～)と一緒に**ナゴヤ球場**(名古屋市中川区)へ観戦に出かけたり、休み時間に野球やソフトボールに興じたりしました。本格的に野球を始めたのは**伊曾島小学校**3年生で**伊曾島スポーツ少年団**の野球チームに加わった時のことです。コーチが買ってくれる練習後のアイスクリームも楽しみでしたが、負けず嫌いの性格から**長島温泉**(長島町浦安)や**志ぐれ城**(和泉)までの走り込み、近所の自動車修理工場からもらったタイヤの引き回しなどの練習に打ち込みました。家族で外出に出かけると帰路は走って帰るという徹底ぶりでした。



## <三度の甲子園出場>

長島中学校では軟式野球部に入り、部活動を通じて上下関係や礼儀を学ぶことができたといいます。その後、「甲子園に出るんだったら中京だ」と考え、ユニフォームへの憧れもあって**中京高等学校**(名古屋市昭和区、現在の**中京大学附属中京高等学校**)に半特待生として進学し、硬式野球部に所属しました。同級生に**阪急ブレーブス**(現在の**オリックス・バファローズ**)に進む**野中徹博**(1965～)、広島東洋カープで活躍する**紀藤真琴**(1965～)がいたことから三番手の投手で、公式戦での登板は2年生の際、秋季東海大会時の1イニングのみでした。また、柔道の授業で肘を痛め



(左) 少年時代の森昌彦 (左側)  
(中) まつや寿司内のギャラリー  
(右) まつや寿司 (長島町福吉)



ていましたが、それでも「誰よりも必死に練習した」といい、在学中に昭和 57（1982）年 3 月から 4 月にかけて行われた**第 55 回選抜高等学校野球大会**に出場してベスト 4 となりました。同年 8 月の**第 64 回全国高等学校野球選手権大会**ではベスト 4、昭和 58（1983）年 8 月の**第 65 回大会**でもベスト 8 という三度の甲子園を経験しました。レギュラーではありませんでしたが、コーチーズボックスやベンチから大声で応援し、バッティングピッチャーを務めました。苦楽を共にした仲間たちと旅館で楽しく過ごしたことが楽しい思い出として記憶に残っているそうです。

高校卒業後は**亜細亜大学**（東京都武蔵野市）経営学部経営学科に進みましたが、ここでは中日ドラゴンズで活躍し、後に監督となる**与田剛**（1965～）が同級生におり、公式戦での登板は多くはありませんでした。ただし、昭和 62（1987）年、**東都大学野球連盟（東都リーグ）**の秋季リーグにおいてリリーフで唯一のリーグ戦勝利をあげています。

## <社会人野球で橋戸賞を受賞>

大学卒業後は**日本電信電話**（平成 11（1999）年 7 月 1 日に分社化して**西日本電信電話**、本社東京都千代田区）に入社して、**NTT 東海硬式野球部**に所属しました。平成元（1989）年にはチーム最優秀防御率、最多勝利投手賞を受賞しました。しかし、平成 5（1993）年に右膝を痛めて一時は引退を勧められたものの、半月板除去の手術を受けて見事に復帰します。平成 6（1994）年 8 月 1 日には**本田技研鈴鹿硬式野球部**（現在の Honda 鈴鹿硬式野球部）の補強選手として参加した**第 65 回都市対抗野球大会**で優勝し、**橋戸賞**を受賞しています。橋戸賞とは、同大会や早慶戦の創設者である**橋戸信**（1879～1936、号は頑鉄）の名を冠した最優秀選手に贈られる賞です。橋戸は、**六華苑**をロケ地に使用したNHK大河ドラマ『**いだてん～東京オリムピック噺～**』に登場したスポーツ愛好団体「**天狗倶楽部**」のメンバーであり、没後の昭和 34（1959）年に**野球殿堂**入りしています。

## <アトランタ五輪で銀メダル獲得>

平成 6（1994）年 10 月、広島県で開催された**第 12 回アジア競技大会**（アジア大会）の日本代表に選ばれ、14 日の大韓民国との決勝戦ではリリーフとして逆転勝利による金メダル獲得に貢献しました。その後、平成 7（1995）年 9 月の**第 18 回アジア野球選手権大会**で優勝、同年 10 月の**国際野球連盟（IBAF）インターコンチネンタルカップ**で準優勝となりました。

そして、平成 8（1996）年 7 月から 8 月にかけてアメリカ合衆国の**アトランタ**で開催された**第 26 回オリンピック競技大会**の日本代表に最年長の 30 歳で選ばれ、予選リーグを 8 チーム中 3 位で通過して 8 月 2 日の決勝戦では強豪国キューバと対戦しました。序盤に 5 点差をつけられたものの 5 回に満塁本塁打によって一挙に同点に追いつきました。森は 7 回裏からマウンドに立ち、ホームランは打たれたものの、実家で応援していた父はテレビ局の取材に「世界の晴舞台で息子が今投げているそれだけでいい。嬉しい」と語りました。結果的には 9 対 13 で敗れるも堂々の**銀メダル**を獲得し、自身も「**結果は銀メダルでしたが、9 試合中 6 試合に登板しまして満足しております**」とコメントしています。この登板数はチーム最多でした。以下、次号に続きます。

平成 8 年 7 月 19 日、アトランタ五輪開会式で柔道日本代表の田村亮子（右側、1975～、現在は谷姓）と撮影

